

『三部經大意』に見られる非法然的教説について

坪 井 俊 映

一

『黒谷上人語灯録』の編纂者望西楼了恵は、その末尾に『本願奥義』一卷、『往生機品』一卷等数部の、名を法然に借る偽書のあることを伝え、了恵に先立って親鸞によつて筆写された『西方指南抄』の中に収められている『三機分別』一卷なる書は一念義系のものの編集といわれて、法然のものでないといわれている。^①このように法然滅後四十五年乃至八十年頃には既に名を法然に借る偽書がかなり存在していたことが知られる。かかる偽書が作られること自体は、法然の威大な人格とその高邁な識見を敬仰するものが、自己の説くところが法然の真意であることを明証するために、名を借りて述作したものと思われる。しかし、年次を経過するにしたがつて、その数量が次第に増加していることが知られ、黒田望月共編の『法然上人全集』（明治三十九年初版）には「真偽未詳」として『金剛宝戒訓授章』以下二十三部を収め、石井教道編の『法然上人全集』（昭和三十年初版）には『南都大仏供養物語』以下八十六部を「伝法然書」として収録している。

さらに、これに関連して、法然の門下が分派して五流になったといわれ、後世、十五流または二十四流あったと数

えあげられているが、これらの門流の徒はいずれも、法然の教説を布衍し、その真意を開顯するために、それぞれ自身の学ぶところ、信ずるところに従って、法然の所説を解説したために、多くの異解異説が生じたものと思う。これから門流の徒はいずれも自流の理解をもって正義とし、他の流派を異解とし、甚しきに至っては邪義といって貶すものもあらわれたのである。しかし、いずれの流派においても、師法然の教説とは全然異なった別個の教えを説くものと考えず、各派いずれも法然の教説を布衍して、真意を開顯するものという。自負の念をもっていたのである。したがって、門流の徒が講説したものの中に、その教えを聞いた筆録者が誤って法然のものとして記述するものも現われたと思うのである。

このように、門下に異解が続出し、「金鎗弁じ難し」と評されていることは、法然の門下門流の徒がいずれも秀い出た学匠であったことによるとともに、法然自身において、自発的に自己の所信をまとめて一冊の書物として、門人または帰依者に示して、以てそれらの人々の依憑とすべきものを述作されなかったことにもよると思われる。法然は智慧あり、学識ある念仏行者であるが、自己の所信を一冊の書にまとめる、いわゆる学者ではない。平日二万三万の念仏を修された学識深き念仏行者であって、依頼により、または教えを尋ね来るものに対して自己の所信を述べられた対機説法的なもののばかりである。これは現存の法然のものとされている書物が短篇なものばかりであり、そのほとんどが門人の筆録になったものであることによっても容易に領かれることである。

かの『浄土三部経釈』は末尾の奥書によると俊乗房重源の請によって、南都東大寺において南都の学匠達を前にして、善導の立場によって『浄土三部経』を講説されたときの筆録であるが、筆者はあきらかでない。法然自身の手控書でないかとも思われる。『逆修説法』は外記禅門師秀なる在俗信者が七七日の逆修をつとめた時、導師として招かれた法然の説法を門人が筆録したものであって、一人の信者に対する講説の記録である。筆者は不明である。さらに

『選択集』は法然の帰依者である藤原兼実の求めによって述作されたものであるが、その内容は上記の『浄土三部経釈』や『逆修説法』の所説を基にして、それに自己の所信を加えてまとめられたものであって、その筆録と堪文はいずれも門人の手になるものである。このほかに法然の述作書とされるものが多く伝わっているが、ほとんどが門人の筆録である。しかし、その中、『選択集』は末尾に、

庶幾一經^{ハヒチ}高覽^{コウガン}之後^{ノチ}、埋^{ツマ}于壁底^{ヘキソコ}、莫^レ遺^ス窓前^{マドノマエ}、恐^{クハ}令^メ破法之人^{ハクホフノヒト}、墮^ツ於惡道^{アクダウ}也

とあって公開をはばかれたものであるから『浄土三部経釈』や『逆修説法』のごとき対機説法的なものでなく、法然が説かんとする真意が憶することなく記述されていると思われる。したがって、法然の思想を知る上に充分依憑とするに足るものと思われる。

この『選択集』の思想を中心として、その他に『浄土三部経釈』および『逆修説法』等の考えを参考にして、考え合せて、いまこの『三部経大意』の内容を見ると、『選択集』等に説くところと異なった教説が数々見られて、はたして法然の真撰とすべきや、疑義なきを得ないのである。

『三部経大意』には現在五種類のものが存在している。

一、『三部経大意』一卷（金沢文庫蔵）、内題に「浄土三部経大意、金沢称名寺」とあり、末尾に「三部経大意、源空撰、建長六年甲寅五月十五日、於平針郷新善光寺書了」の奥書を有す。石井編『法然上人全集』の底本として収輯す。

二、『三部経大意』一卷（高田専修寺蔵）、末尾に「正嘉二年戊午八月十八日、書写之」の奥書あり、定本『親鸞聖人全集』の解説によると、親鸞八十六歳の書写本を底本として、慶信の書写でないかという。これには源空撰の識語は見られない。定本『親鸞聖人全集』所収す。

三、『三部経釈』一卷（元亨版和語灯録）。

四、『三部経釈』一卷（寛永版和語灯録）。

五、『三部経釈』一卷（正徳版和語灯録）。

この表を見てもわかるように、金沢文庫本と専修寺本とは『三部経大意』とされているに對し、元亨版・寛永版・正徳版では『三部経釈』となっている。そして金沢文庫本と専修寺本は、ともに鎌倉時代の筆写本が現存しているに對し、他の三本はいずれも版本である。そして内容において、金沢文庫本と専修寺本とは類似し、同じ系統のものとわれ、元亨版・寛永版・正徳版とは同じ系統といわれている。しかし、元亨版と金沢文庫本と比較するに内容の出没がはげしく、ことに至誠心釈の項において、元亨版は金沢文庫本より多くの抄略削除が見られる。これを抄略削除と見るか、加筆と見るかは、にわかには定めることができず、全文に亘って語句の出没が激しいために、厳密なる五本の比較研究をして、その出没にともなう内容思想の相違を研究することなくしては決論を出すことはできないから、いまは五本のうち、最古の写本である「金沢文庫本」によって論をすすめることにする。

二

『三部経大意』を見ると、上記したごとく『選択集』を初めとして、法然の他の述作書に見られない教説が多々見られ、或いは法然門下の説でないかと思われるものが存するので、不審に思われる文を出し、その考えに関連する釈義を『選択集』および『浄土三部経釈』等より並記して、異解なることをあかし、さらに法然門下において、これに類似する教説をなす人師の説を出して略解することにする。

(一)『三部経大意』の文

弥陀如来ハ因位ノ時、専ラ我名ヲ念セム者ヲ迎ムト誓給ヒテ、兆載永劫ノ修行ヲ衆生ニ廻向シ給。濁世ノ我等カ依怙、末代ノ衆生ノ出離是ニアラスハ何ニヨカ期セム。

とあり、『三部經大意』には、この文に先立って、諸仏の願に二種ありといつて、上求菩提と下化衆生の二をあることあかし、ついで上求菩提の本意は下化衆生の願にありといつて、衆生摂化に仏の本意のあることを説いて、続いて、上記のごとく下化衆生を「衆生ニ廻向シ給」という。これは往相廻向、還相廻向の考えによつて法蔵菩薩の因位の願行と成仏後の衆生摂化を解釈したものと思われるが、法然にては「廻向」なる語はつねに衆生側よりの廻向に用いられていて、仏の廻向なる考えは見ることができない。

廻向とは淨影寺惠遠の釈義によると「挾善而求、名曰廻向、謂廻己善、向大菩提。又廻己善、向彼国生、故名廻向」といって、自己の修した諸善根をもつて、悟りを求め、また淨土に往生することを願うことである。善導法然ともに同じ考えであつて、『選択集』では善導の『觀經疏』散善義の廻向発願心積をそのまま引用して、言「廻向発願心者、過去及以今生、身口意業所修、世出世善根、及隨喜他一切凡聖、身口意業所修、世出世善根、以_ハ此_ヲ自他所修善根、悉皆真実深信、心中廻向願_シ生_ニ彼国」

と記し、さらに続いて、

又廻向発願、願_シ生_ニ者、必須決定真実心中、廻向願作_ニ得生想_ヲ、此心深信、由若_ク金剛、不_レ為_ニ一切異見異学、別解別行人等、所_ニ動乱破壊_セ上

と説いて、衆生が行じた諸善根（雜行）の功德を淨土往生のために廻向すと説いて、衆生の諸善根廻向をあかしている。そして、さらに、

又言_ハ廻向_ト者、生_ニ彼国_ニ已_テ、還起_ニ大悲_ヲ、廻入_ニ生死_ニ、教_ニ化衆生_ヲ、亦名_ニ廻向_ト也

と説いて、浄土に往生して後、再び穢土に還り来って、衆生を教化することを廻向という。これを還相廻向といい、前の諸善根を廻向して浄土を願生することを往相廻向というが、いずれも衆生の廻向であって、仏の廻向ではない。さらに『選択集』では五番相對を論ずるところにおいて、

次廻向者、修^ニ雜行^一者、必^ス用^ニ廻向^一之時、成^ス往生之因^一、若^レ不^レ用^ニ廻向^一之時、不^レ成^ニ得往生之因^一、

と説いて、雜行を修するものは廻向を用いねば浄土往生はできぬという。これまた衆生の側より論ずる廻向である。

このように法然は『選択集』において、淨影寺惠遠、善導の釈義を踏襲して、衆生の諸善根廻向と解しているが、『三部經大意』では仏の廻向を説き、仏が因位において菩薩道を修せられた時の諸功德を衆生に施与されることを廻向と呼んでいるのであって、法然の考えとは異なった意味に廻向の言葉を用いているのである。

されば、法然門下において、この廻向なる言葉をいかに解しているかと見るに、証空は『觀經疏自筆鈔』散善義卷一において、廻向發願心積の文を釈して、

以^ニ此^一、自他所修善根、トライハ、正シク廻向ノ心ヲ積シ願スナリ、我既ニ道理ヲ得ツレハ、善ノ体ニ於テハ、自他彼此差別ナシ、皆差別ナシ、皆悉ク往生極樂ノ為ニ説キ置ケル善根ノ縁、機ノ差別ニ依リテ修セリ、今道理ヲ得ツレハ、一善モ洩レス、皆浄土ノ因ナリト悟リテ廻向スルナリ

と説いて、觀門の道理を悟れば諸善ことごとく浄土の因なりと悟りて廻向すといつて、法然と同じく衆生の廻向を説いている。また『自筆鈔』玄義分卷三に六字釈の文を解して、^⑤

此ノ發願ハ唯願ノミニアラズ、行ニ相応シテ願行具足スレハ、行ヲ挾ミテ求メ赴ク廻向ノ義アリ、故ニ又廻向之義ト云フ、今ノ廻向ハ又則チ觀門ヲ指シテ是ヲ名ツク、觀門ノ功德ハ悉ク弥陀ノ功德ナリト知ルハ、因ヲ果ニ廻ラス廻向ノ義ナリ

と説いて、行を挾んで浄土を願うを廻向というとともに、因を果に廻らすことをも廻向といって、観門の功德を弥陀の功德なりと知るをも廻向と解している。これは衆生の廻心をいうものと思われるが、いずれも衆生の廻向であつて、仏の廻向を説くものではない。

上記のごとく、淨影寺惠遠、善導、法然、証空等の廻向説に対して、仏の廻向を説くものに親鸞の考えがある。親鸞は『教行信証文類』信巻において、『無量寿経』下巻に説く願成就文を読みかえて、

諸有衆生、聞其名号、信心歡喜、乃至一念、至心廻向、願生彼国、即得往生、住不退転、

(あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歡喜せんこと乃至一念せん、至心に廻向せしめたまへり、彼の国に生せん願せば、即ち往生を得、不退転に住せん)

と訓じ、如来の至心廻向を説いている。また上記の廻向発願心釈(第二釈)にも特異の訓点をつけて読み変えてゐる。即ち『同』信巻に、

回向発願生者、必須決定、真実心中、回向願、作得生想、此心深信、由若金剛、不為一切、異見異学、別解别行人等之、所動乱破壊

(回向発願して生ずる者は、必ず決定して真実心中に回向したまへる願をもちいて、得生の想をなせ、此の心、深信せること金剛のごとくなるによりて、一切の異見異学、別解别行人等のために、動乱破壊せられず)

と訓じて、如来が真実心の中より回向されることをあかし、さらに回向について、

是以如来、悲憫一切苦惱衆生海、於不可思議、兆載永劫、行菩薩行一時、三業所修、一念一刹那、無不清淨、无不真心、如来以清淨真心、成就、円融无碍、不可思議、不可称、不可説至德、以如来至心、回施、諸有一切煩惱、惡業邪智群生海、則是彰利他真心、故疑蓋无難

と説いて、如来の成就したまえる至徳を至心をもって煩惱の衆生に回施（回向）されることを説いている。かかる親鸞の如来回向説は上記のごとく法然の教説の中においては見られぬものである。

この親鸞と同じ如来回向説をなすものに、親鸞の先輩にあたる隆寛の教説の中に見ることができる。

隆寛は『散善義問答』において、

凡、弥陀如来、名号相好光明、乃至地上地下、一切莊嚴等、偏為施求念者、所成就也、為与趣求人、所莊嚴也

といつて、阿弥陀仏が成就された外用の功德たる名号光明乃至浄土の莊嚴は求念し趣求する衆生に施与するためのものであるという。

この文には回向、回施なる文字は見るができないが、この場合の施与と回向とは同じ意味をいうものと解することができる。さらに如来の回向について、醍醐本『法然上人伝記』に収録されている「三心料簡以下の二十七法語」の初めに出づる「三心料簡」において、如来の真実心を積する文に、

此以真実施者、施何者云、深心二種積、第一罪惡生死凡夫云、施衆生也、造惡之凡夫、即可由此真実之機也

と説いて、如来の真実を罪惡生死の凡夫に施与されることを説いている（この積は隆寛の説の混入と思われる）。このほかに隆寛は回向について、『散善義問答』には「若約廻余行、向念仏之人、即正意也」とか、「於此深信中、起決定得生想、称之曰廻向発願心也」とかいって、余行を回して念仏に向ふこと、および、決定得生の想を生起することを回向、または回向発願心とも釈して、衆生の回心という場合もあるが、また、上記のごとく如来が成就された功德を衆生に施与することをも回向といっているから、この『三部経大意』に説く「兆載永劫の修行を衆生に廻向

し給」の考えは、法然の考えと見ることは出来ず、隆寛の考えを述べたものではないかと考えるのである。

三

さらに、上述の如来回向説に関連して『三部経大意』では如来の真実行を釈す文において、

何ヲ以テノ故ニ、正ク彼阿弥陀仏、因中ニ菩薩ノ行ヲ行シ給シ時キ、乃至一念モ一刹那モ三業ニ所修皆是真実心ノ中ニ作ニヨツテナリ、凡所^レ施趣キ求ルガ為ニ亦皆真実ナリ

と読んでゐる。この文は『觀經疏』散善義にあかす至誠心積の下に、如来の因位における菩薩道の真実について解釈する文である。法然は『選択集』にこの全文を記載している。しかし、現行流布本の『選択集』（土川勸字宗学興隆会校訂、浄土宗務庁刊）の読み方は上記の『三部経大意』の読み方とは異なる。すなわち

由^{テナリ}下^ニ彼阿弥陀仏因中、行^ニシタマヒシ^ニ菩薩行^ニ時、乃至一念、一刹那、三業所^ニ修^{スル}、皆是真実心中作^ニ、凡所^ニ施為趣求^{スル}、亦皆真実^上

と訓じて、初めの「由」の字を全文に掛けて読み、阿弥陀仏が因位の時、法蔵菩薩として修せられた上求菩提下化衆生の菩薩道の真実を説く文とされている。しかるに『三部経大意』では「由」の文字を法蔵菩薩が修せられた菩薩道の真実を説くものとする考えは同じであるが、「凡所施為趣求亦皆真実」について、これを菩薩道の真実を説く文より除いて、読み方も「凡所^レ施趣キ求ルガ為ニ亦皆真実ナリ」として、選択集（現行流布本）と異なる読み方をしている。

『選択集』の、この文に対する法然の読み方がいかなるものであったか、古写本について見るに盧山寺本にはこの文の処が落してゐてあきらかにすることはできないが、当麻往生院本では「正由^{マサシクナリ}下^ニ彼阿弥陀仏因中、行^ニシタマヒシ^ニ菩薩行^ニ時、

乃至一念一刹那^{ヲモ}三業所^ニ修^{スル}、皆是真実心中作^{シタマヒシニ}、凡所^ニ施為趣求^{スル}亦皆真実^{ナルヘシ}」と訓じて『三部經大意』の文と同じく、「皆真実心中ニ作シタマヒシニ由テナリ」と訓ずるが、次の句は「施為趣求スル所、亦、皆真実ナルベシ」と読んでいる。延応版では現行流布本（土川校訂本）と同じ読み方をしている。この文の読み方について、法然の他の語録においてその例証を見出し得ぬために、上記三例の読み方の中、法然がいかなる読み方をされたか同がうことができないが、良忠は『選択伝弘決疑鈔』第三に、^⑤「凡所^ニ施為趣求^{スル}亦皆真実^{ナルヘシ}」の文を釈して、

施為趣求者、下化衆生、名為^ニ施為^{スル}、上求菩提、名為^ニ趣求^{スル}、

と釈して、法蔵菩薩が修せられた菩薩道の^⑥上求菩提、下化衆生の真実なることを説く文としている。そして、四十八願の中、第十二、第十三、第十七の撰法身願と、第三十一、第三十二の撰淨土願の五願をもって、法蔵菩薩の趣求（上求菩提）とし、それ以外の四十三の撰衆生の願を施為（下化衆生）としている。

これと同じ考えにあるものに証空の解釈がある。証空は『観經疏自筆鈔』散善義卷一に、^⑦

「何以^ヲ故^ニ乃至皆真実^{ナルニ}」此ノ一段ハ正シク雜毒ノ行ノ生ズベカラザル故ヲ出ス、弥陀因位ノ行、一念モ雜毒ノ義ナシ、彼ノ真実心ヨリ顯レタル土ナレバ、相順ノ因ニテ生ルト云ハハ、スベテ可ナラズト証スルナリ、此クノ如ク証スル心ハ、弥陀ハ、真実ノ心ヨリ土ヲ顯シテ、衆生ヲ導キ給フ能化ノ真実ナリ、凡夫ハ、彼ノ土ハ凡夫ノ爲ニ設ケ給ヘリト尋ネ入リテ、此ノ謂レヲ知ル所化ノ真実ナリ、能化所化、既ニ真実ナレバ、往生疑ハズト示スナリ、……此ノ中ニ施為トイハ、下化衆生ノ心ナリ、趣求トイハ、上求菩提ノ心ナリ、二トモニ真実ニシテ成ゼル土ナレバ、一切衆生ノ真実ノ悟ノ上ノ行ハ皆真実ナリト定ムル心ナリ

と釈して、現行流布本の『選択集』、『決疑鈔』と同じ読み方をして、法蔵菩薩の因位における上求菩提下化衆生の菩薩道の真実を説くものと解している。証空は、法然が『選択集』を述作せられたとき堪文役をつとめた人であるから、

法然が読まれた通りに読んだものと思われるから、現行流布本の『選択集』（土川校訂本）の読み方は法然の読み方をそのまま伝えてあるものと思われる。したがって、『三部経大意』の読み方は法然の読み方と異なった読み方をしてゐるものといふことができる。

この『三部経大意』と同じ読み方をしてゐるものに親鸞がある、親鸞は『教行信証文類』信巻において、善導の『觀經疏』散善義の文を引いて、^④

正、由^レ彼阿^レ弥陀^ニ仏、因^ニ中^ニ行^ニ善^ニ薩^ニ行^ニ時、乃至一念一刹那、三業所修、皆是真^ニ実^ニ心^ニ中^ニ作^ニ上^ニ、凡^ニ所^ニ施^ニ為^ニ趣^ニ求^ニ、亦皆真^ニ実^ニ、^⑤

（正しく彼の阿弥陀仏、因中に菩薩の行を行し時、乃至一念一刹那も三業の所修、皆是真実心の中に作したまひしに由てなりと、凡そ、施したまふ所る趣求を為す、亦皆真実なり）

と訓ず。この「凡^ニ所^ニ施^ニ為^ニ趣^ニ求^ニ、亦皆真^ニ実^ニ」の文について、大谷派の円乗院宣明は、^⑥

凡所施等、仏は能施なり、よく衆生へ渡し給ふ。何を渡し給ふと云へば功德をわたす、……………為趣求とは南無阿弥陀仏を信ずる事、……………趣求とは趣向なり、願求也

と釈し、また、香月院深勵も同じく、

凡所施為趣求亦皆真実、是は仏の能施が真実なる故に、所施の衆生をして真実功德を成就せしむ

と釈して、「凡所施為趣求亦皆真実」の文を仏の下化衆生を釈す文として、この「彼の阿弥陀仏因中に菩薩行云云」の文を、法蔵菩薩の因位における菩薩行の真実と、成仏後の下化衆生の真実を説くものと解している。

この親鸞の『教行信証文類』の読み方と同じ読み方をするものと思われるものに隆寛のものが見られる。隆寛は『具三心義』上において、^⑦至誠心釈の下に出づる「由阿弥陀仏因中行菩薩行……………亦皆真実」の文を釈して、

……二明^ス弥陀因中三業、皆真実心中作^ノ、所謂正由彼阿弥陀已ト是也、言真実心中^ト者、悟^テ無生理^ノ、証^シ真実智^ヲ、於^テ此心中、所^レ修三業之行、順^ニ法性^ニ故不^ニ虚偽^ニ、順^ル実相^ニ故不^ニ顛倒^ニ、是故云真実心中作^ト也、三明^下依^テ真實行^ニ所^レ成^{スル}真実願故、所^レ施利益、亦真実^{コト}、所謂凡所施已下是也

といっているから、「凡所施為^ニ趣求^ニ」の文は「凡そ施すところ趣求のために、亦皆真実なり」と読んだようであり、これは仏の下化衆生の真実をいうものと解しているようである。さらに『散善義問答』では上記したごとく。

凡弥陀如來、名号相好光明、乃至地上地下、一切莊嚴等、偏^ニ為^レ施^ニ求^{スル}念^者、所^レ成就^也、為^レ與^ニ趣求人^ニ、所^レ莊嚴^也、是以結詞云、凡所^レ施為^ニ趣求^ニ亦皆真実

と釈しているから、この読み方、およびその考えは『三部經大意』の考えと同じものと考えられる。したがって、「何ヲ以テノ故ニ……凡所^レ施趣キ求ルカ為ニ亦皆真実ナリ」という文は非法然的教説といふことができる。

四

『三部經大意』には仏の光明について、左のごとき説をなしている。

第九真身觀ニ光明遍照……撰取不捨ト云ヘル文有リ、濟度衆生ノ願ハ平等ニシテ、差別有ル事トナケレトモ、無^キ緣衆生ハ利益ヲカウフル事アタハス、此故ニ弥陀善逝、平等慈悲ニ催サレテ、十方世界ニ遍ク光明ヲ照シテ、一切衆生悉ク緣ヲ結ハシメンカタメニ、光明無量ノ願ヲ立給ヘリ、第十一(二)ノ願是也、次ニ名号ヲ以テ因トシテ、衆生ヲ引撰セムカ為ニ念仏往生ノ願ヲ給^{タテマツ}ヘリ、第十八願是也……然ハ光明ノ緣ト名号ノ因ト和合セハ撰取不捨ノ益ヲ蒙ラム事、不可疑

とあつて、第十二願に説く光明を緣、第十八願の名号を因として、光明名号の因縁によつて撰取不捨の益を得て淨土

往生の益を得ると説きあかしている。この光明を縁とする考えは法然において見られぬものである。

『選択集』第七篇には「弥陀、光明、不_レ照_二余行者_一、唯撰_二取_レ念仏行者之文_一」と題して『観経』の第九観に説く、「光明遍照十方世界云云」の文、『観経疏』に説く親縁等の三縁の文、及び『観念法門』にあかす心光摂護の文等を引いて、仏の光明は念仏の衆生のみを照して、余行者の者を照らさずといひ、その理由に、

答曰_、解_{スル}有_二三義_一、一者親縁等_、三義如_レ文_、二者本願義_、謂_ク余行非_二本願_一、故不_レ照_二撰之_一、念仏是本願_、故、照_二撰之_一

といひて、三縁の義、本願の義を説いて、念仏するものだけに光明の照摂があると説いている。さらに法然の『観経』には、

十二光照遠近者、經云一一光明遍照_二十方世界_一、念仏衆生、有_レ近有_レ遠、近者与_二極樂_一、於_二近隣世界_一、能念_二弥陀

仏_一、照_レ之_レ名_レ之_レ為_レ近_、次遠者与_二極樂_一、遼遠之所_、能念_二弥陀_一、即照_レ之_、名_レ為_レ遠_、

とあつて、『選択集』の説と同様に念仏の衆生のみ光明の摂益あることを説いている。そしてさらに、弥陀の光明がただ念仏の衆生のみを照して、一切の顯密の行人や一切の事理の行者を照らさなかつたなれば、如来の無縁の慈悲に漏れるではないかという疑義を出し、これに答えて、八十華嚴、六十華嚴を誦して事々円融の旨を讀し、純真法界の理を觀する人乃至、五逆十惡の家、毀禁破戒の窓を照らさないことについて、

如此_レ此_レ法修行之人_、不_レ論_二權實_一、不_レ云_二顯密_一、撰取_二光明_一、光局_ニ唯念仏者_一、其_レ故_於經論博達_レ之者_、照_レ之_レ娑婆

世界_、愚痴者多_、智恵少_、……取_レ要思_レ之_、局_ニ智人_一、愚人可_レ漏_、故今撰取_二光明照_二唯念仏者_一と説いて、光明は念仏の行者のみを照らすと説いている。これは聖道門の行人、及び諸行往生の行者には光明の摂益

のないことをいうのであって、念仏を修するものは智者愚者をえらばず光明の摂益を得ることができるといふ。

法然の『選択集』および『観経釈』における光明と念仏に対する考えと、『三部経大意』における光明名号因縁の考えとを比較して見るに、『三部経大意』の光明に対する考えは、法然の考えと異なったものであることは容易に気付かれるであろう。『三部経大意』の説は法然の説を布衍したものではなからうか。

この光明摂取について、証空は『観経疏自筆鈔』定善義卷二において、「光明遠近」を釈して、

光照遠近トイハ、光明遍照十方世界ヲ指スナリ、光所^レ及偏蒙^ニ摂益^ニトイフハ、念仏衆生、摂取不捨ヲ指スナリ、是則チ広ク十方ヲ照ス事ハ、念仏ノ衆生ヲ照サン為ナレバ、十方ヲ照ス光明、皆、摂取不捨ノ為ト云フ事ヲ釈シ顯スナリ

といって、如來の光明は念仏の衆生を照す光明であると釈して、法然の『選択集』の所説と同じ考えを述べている。

しかるに親鸞は『教行信証文類』行巻において、光明と名号の關係について、次のごとく説いている。^⑧

良知^{トニ}无^ニ徳号慈父^ノ、能生^ノ因^ノ闕^ニ、无^ニ光明悲母^ノ、所生^ノ縁^ノ乖^ニ、能所^ノ因縁^ノ、雖^モ可^ニ和合^ス、非^ニ信心業識^ノ、无^レ到^ニ光明土^ニ、眞実信業識、斯則^レ為^ニ内因^ト、光明名父母、斯則^レ為^ニ外縁^ト、内外因縁和合^{シテ}、得^ニ証報土眞身^ヲ

と説いて、光明と名号を外の因縁とし、信心を内因として、内外因縁和合するところに報土往生ありとし、さらに、『正信偈』には「光明名号顕因縁」とも説いている。また覚如の『口伝鈔』によると、「光明名号の因縁といふ事」といふ章において、

十方衆生のなかに、淨土教を信受する機あり、信受せざる機あり、いかむとならば『大經』のなかにとくがごとく、過去の宿善あつきものは、今生にこの教にあふて、まさに信樂す……宿善開発する機のしるしには、善知識にあふて開悟せらるるとき、一念疑惑を生ぜざるなり。その疑惑を生ぜざること、光明の縁にあふゆへな

り、もし光明の縁もよをさずば、報土往生の真因たる名号の因をうべからず……しかれば、往生の信心のさだまることは、われらが智分にあらず、光明の縁にもよをしそだてられて、名号信知の報土の因をうとしるべしとなり。

といって、光明名号の因縁を説くが、これは光号因縁によって摂取不捨の益を得るのではなく、親鸞の『教行信証文類』と同じく、信心のさだまる因縁として光明と名号を説くものである。

このほかに弥陀の光明について注目すべき考えを述べているものに、伽陀婆羅摩（隆寛）述といわれる『弥陀本願義』の説が見られる。この第三十三願「光触身柔濡（軟）願」（了慧は触光柔願という）の釈に、

答、今所言光明者摂取之光也、此光照稱名人也、依稱名力、蒙光攝者、无不往生、得往生者、身心柔濡（軟）、非人天故、云超過也。問、上十二願光明、今此願（第三十三願）光明、同異何。答、約三身、本願所成、光明其体、全無異、約所化機、上（十二願）遍照常光也、今攝取光也、觀无量寿經云、光明遍照十方世界、念仏衆生摂取不捨

と説いて、第十二願にあかす光明は遍照の常光であるといひ、第三十三願の光明をもって摂取の光明であるとする。そして『弥陀本願義』は第十二願（了慧は光明無量願という）を『仏光无遍照願』と名づけ、法蔵比丘が二百一十億の仏国土の中の仏光無遍の国土より選取したものであるが、この国土に往生する易行は無いから、法蔵は名号をもって本願として、十方の衆生を易すく浄土に往生せしむといひ、第十二願を釈している。そして光明と名号の關係について、

問、光照無遍照ニ十方仏国、為衆生有何益耶。答、弥陀本願、以名号、引導群生、光明便名号用也と説いて、名号と光明の關係を体と用との關係をもつてあかしている。しかし、これには光明を縁とする説明は見ら

れないけれども、第十二願をもって仏光無辺際願と名づけ、この光明をもって遍照の常光とし、第三十三願をもって摂取の光明とする釈義は『三部経大意』の考えに類似するものと思われる。第十二願の遍照の常光がいかなる目的のための光明であるか、この文のみにては見る事ができぬが、「縁とす」る光明であるとするならば、『三部経大意』の説と同じくなる。このように、光明名号因縁なる考えは法然門下において見られるが、この説は法然の『選択集』、『観経釈』等において見られぬものであるから、この光号因縁説は非法然的教説ということが出来る。

因みに法然の光明と第十二光明無量願に関する考えを見るに、『逆修説法』において、名号の中に光明と寿命の二義が備わっているとして、光明について十二光仏の徳のあることをあかし、続いて光明に常光と神通光の二光を説き、常光について、

此阿弥陀仏常光、於_ニ八方上下無央数諸仏国土、無_レ所不_レ照_{上云}

といい、常光に異説あつて、『平等覚経』では頭光を指し、『観経』にては総じて身光を指し、長照不断に照す光明であるという。神通光について、

阿弥陀仏神通光者、摂取不捨光明也、有_ニ念仏衆生之時_ハ、無_ニ念仏衆生之時_ハ無_レ照_{下云}故也

といつて、神通光は摂取不捨の光明であるという。そして、この光明は諸仏の光明より勝れたものであると説いて、「得_下如_上是殊勝光_上事、則酬_下因位願行_上」といつて、第十二願酬報の光明であるという。即ち、第十二願の光明無量願にいう光明は摂取の光明であると説く、これは上記の『弥陀本願義』の説と異なるものであるが、『弥陀本願義』の説は法然の光明釈を布衍したものとすべきであらう。

次に注目すべきものは至誠心、積に對する自力他力の釈義である。即ち『三部經大意』には、

但此至誠心ハヒロク定善ト散善ト弘願トノ三門ニワタリテ積セリ、是ニツキテ惣別ノ義アルベシ、惣者自力ヲ以テ定散等ヲ修シテ往生ヲ願フ至誠心也、別者他力ニ乗シテ往生ヲ願スル至誠心ナリ

の文である。この文の前後約千七百余字は元亨版『和語灯録』および正徳版には見られないものであつて、金沢文庫本および高田專修寺本にのみあるものである。しかし、読み方について高田專修寺本には読み変えのところが多々見らる。この至誠心を總別に分つことは法然の『選択集』にも見られる説であつて、第八「三心篇」の末尾に、

此三心者、総而言之、通諸行法、別而言之、在往生行、今挙通撰別、意即周矣

と説く考えをうけたものと思われる。良忠は『選択集』第四において、「通諸行法」とは「聖道門に通ず」と「定散の行に通ず」の二釈を出し、「在往生行」は念仏行を指すと釈しているが、総をもつて自力とし、別をもつて他力とする考えは法然の上において見られぬものである。

法然においては、主として自力という場合は聖道門が説く此土入聖の教行をいい、他力とは仏の本願力をいうのである。浄土門の教行について特に自力他力の分別を説くことを見ないのである。

『選択集』第一聖道浄土二門篇において聖道門の難行道なることを論ずるにあたり、曇鸞の『往生論註』の文を引いて、「五者唯是自力、無他力持」といい、「往生浄土用心」には、

あさましき惡世の凡夫の詬曲の心にて、かまへつくりたるのり物にたに、かかる他力あり、まして五劫のあひだ、おほしめしたためたる本願他力のふね、いかたに乘なは、生死の海をわたらん事、うたかひおほしめすへからず

とあつて、他力の用語が見られるが、これは他力即浄土門、即本願をいうのである。また『浄土宗略抄』に、

ただ極樂に往生せんとおもハバ、一向に称名の正定業を修すべき也、これすなハち弥陀の本願の行なるがゆへに、われらの自力にて生死をはなれぬべくバ、かならずしも本願の行にかぎるべからずといへども、他力によらずば、往生とげがたきがゆへに、弥陀の本願のちからをかりて、一向に名号をとなへよと、善導はすすめ給へる也、自力といはわからからを、はげみて往生を求る也、他力といは、仏のちからをたのみたてまつる也

とあつて、弥陀の本願力を他力といい、本願力をたのまずして、生死をはなれることを自力という。また『念仏往生要義抄』に、

問ていはく、称名念仏申す人は、みな往生すべきや。答ていはく、他力の念仏は往生すべし、自力の念仏はまたく往生すべからず。

といい、さらに、

五戒十戒等かたくもちて、やん事なき聖人も、自力の心に住して念仏申さんにおきては、仏の来迎あづからん事、千人が一人、万人が一二人などや候はんずらん

といつて、自力の念仏、他力の念仏なる語が見えるが、法然のいう他力は本願力のことであつて、「自力の念仏」とは六念の初めにあかす念仏と思われ、また「自力の心にて申す念仏」とは三心を具せざる念仏と思われる。このような自力他力の語は処々に見られるが、至誠心に対して自力他力を分別する考えは見ることができない。

しかるに法然門下になると浄土門の中における自力他力が説かれて、自身の教説の特質を示すものとされている。

親鸞は『教行信証文類』化身上巻において、

凡就二代教、於此界中、入聖得果、名聖道門、云難行道、就此門中、有大小頓漸、一乘二乘三乘、権実顕密、豎出豎超、則是自力利他教化地、方便権門之道路也、於安養淨刹、入聖証果、名淨土門、云易行道、就

此門中、有_リ横出横超、仮真漸頓助正、雜行雜修專修也、助除_ハ名号_ヲ已外五種是也、雜行除_ニ正助_ニ已外悉名_ニ雜行_ニ、此乃、横出漸教、定散三福、三輩九品、自力仮門也、横超憶_ハ念本願_ヲ、離_ニ自力之心_ヲ、是名_ニ横超他力_ニ也、斯即專中之專、頓中之頓、

と記して、聖道自力に対して、浄土門を他力というが、その中において、横出漸教、定散、三福三輩九品の行をもつて、浄土門の中の自力仮門とし、横超の教えを横超他力といって、浄土門の中において自力他力を分別している。

かかる親鸞の説に対して隆寛は廻向発願心釈にあかす二河白道の譬喩について、『具三心義』下には、
料知_リ、其_レ前未_レ発_ハ歸_ニ他力願_ニ之心_ヲ也、只以_ニ自力行_ヲ願_ニ往生_ニ之故、以_ニ願生心_ヲ喩_ニ白道_ニ也、……歸_ニ入_ニ他力_ニ之後、以_ニ弥陀之願_ヲ為_ニ白道_ニ、

といい、また、

所以何、既捨_ニ自力願生之白道_ヲ、直向_ニ他力本願之白道_ヲ、豈非_ハ廻_ニ諸行業_ヲ、直向_ニ西方_ヲ乎

といって、自力願生の白道と本願他力の白道の二種白道を説き、また、『極樂浄土宗義』巻下にては、

此宗心者、以_ニ他力_ヲ、除_ニ玄劣_ヲ、雖_モ一念_ノ無_レ憑_ニ自力_ヲ、依_ニ來迎_ヲ、遂_ニ往生_ニ云云

といって、自力と他力の分別を強く説いている。

さらに、証空によると『觀經疏自筆鈔』序分義卷二において、

安心ニ二アリ、一ニハ自力聖道ノ安心、二ニハ他力浄土ノ安心ナリ、自力ノ安心ハ娑婆ニシテ修行スル時、是ヲ用ル、此ノ修行難キ故ニ無_レ有_ニ安心_ニト云フ、他力ノ安心ハ捨命ノ時、浄土ニ生ズルト悟ル、此ノ故ニ、此ニ聞_ニ仏説_ニ浄土_ニト云フ知ルベシ

といって、自力他力を説くが、この文の意は聖道門をもって自力、浄土門を以て他力というのであって、浄土門中の

自力他力を論ずるものではない。

このように法然門下における自力他力に関する諸説を出したが、『三部經大意』に説くごとき安心（至誠心）の内容について自力他力を論ずることは法然の教説の中において見られないものである。殊に、法然は善導の三心釈を全面的に受容して『選択集』に引用し、念仏行者必具の心とされる三心の中の至誠心について、凡夫の生起する真実心とするに對し、法然門下にては、深心の初めに説く機の深信が罪惡の凡夫たることを説くに關連して、罪惡生死の凡夫がはたして真実至誠心を生起することができるや否について、疑義が生じ、隆寛、親鸞等は、これについて特異な釈義をほどこしている。この『三部經大意』の説く自力至誠心、他力至誠心の説も、これらの人々の考えと思われ、法然の教説とすることはできないのである。

このほかに、『三部經大意』には菩提心について、

菩提心ハ諸宗各ノ得意云トモ、淨土宗ノ心ハ淨土ニ生レムト願ルヲ菩提心ト云ヘリ、念仏ハ是大乘行也

といつて、願生心をもつて菩提心という。この菩提心について、法然は『選択集』第三「念仏往生本願」篇において、第十八念仏往生願を釈して、布施持戒乃至孝養父母等の諸行を選捨して専称仏号を選取することを説いて、往生業として菩提心の選捨をあかし、さらに、「三輩念仏往生」篇、「念仏利益」篇、「付属仏名」篇等において、菩提心の不要なることをあかし、『逆修説法』では、

次発菩提心者、諸宗意不同也、今淨土宗、菩提心者、先往ニ生淨土、欲度ニ一切衆生、断ニ一切煩惱、悟ニ一切法、証ニ無上菩提之心也

といい、また、同書に、

善導御意、先生ニ淨土ニ滿ニ菩薩大悲願行ニ之後、還入ニ生死ニ、欲ニ遍度ニ衆生ニ、此心名ニ菩提心ニ

といつて、浄土に往生してのち、四弘誓願等の菩薩道を成満して、その後、生死の世界に入りて衆生を済度しようとする心であるという。法然のこの考えをうけて、聖光は菩提心について、聖道の菩提心と浄土の菩提心をあかし、良忠は菩提心をもつて総安心とし、三心を別安心とし、良忠門下の望西楼了恵は『新扶選択報恩集』において「三心ト菩提心ハ各別ノ義、可_レ至_レ下弁」といって、三心と菩提心とは別個のものと明白に記述している。このように法然および聖光門流においては三心菩提心各別説をなすが、証空は『観経疏自筆鈔』玄義分卷一において、

浄土ニ生ズルヨリ外ニハ、無上菩提得ヘカラズ、故_ニ真実ノ無上心ハ唯此ノ観門ノ三心ナリ、此ノ義ニ依ラハ、三心ヲ指シテ菩提心ト云フベシ……観門の三心ニ依リテ、往生シテ菩提ヲ得ベケレバ、此ノ心ヲ指シテ菩提心ト云フナリ

といつて、観門の立場にあつて論ずる三心は菩提心と釈している。かかる考えに対して隆寛は『極楽浄土宗義』巻中において、

同発菩提心釈者、会_レ之有_二義_一、一者以_二往生極楽人_一、例_二同発菩提心人_一、其義思而応_レ知、二者撰_二衆生_一、令_レ生_二有仏国土_一、以_レ之爲_二菩提心之義也_一、両義取捨、任_二人心_一耳

といつて、極楽に往生を願ずることをもつて発菩提心と解している。

上述したごとく、『三部経大意』が「浄土ニ生レント願スルヲ菩提心ト云ヘリ」という菩提心に対する理解は、法然の説とすることができず、法然門下の徒の説をいうものと思われる。

なおこのほかに、『三部経大意』には、『無量寿経』下巻に説く願成就文を釈して、「願(第十八願)ニハ乃至十念ト説ト云ヘトモ、正ク願ノ成就スル事ハ一念ニアリト明セリ」という説、また「我世ニ出ル事ハ、本意唯タ弥陀ノ名号ヲ衆生ニ令_レ聞タメナリ云云」という説、および「抑、彼国土ニ九品ノ差別アリ、我等何ノ品ヲカ期スベキ」という説

等、非法然的教説と思われるものが多々見られる。

この『三部經大意』は上述したごとく、その中に非法然的教説と思われるものが多々見られるが、しかし、金沢文庫本には末尾に源空撰と撰者名を記し、望西楼了慧は『和語灯録』に収めているから、その当時では法然の真撰のものとしたのであろう。

しかしながら、上米屢説したごとく、非法然的教説が多く見られるから、望西楼了慧の考えをそのまま認めることはできない。されば法然門下の内、何人によって述作されたものかは、容易に決めることはできないが、「西山義の香りの高い箇所がある」という説もあるが、西山義の香りは薄く、筆者は隆寛教説の香りの強いものを見出すのである。

さらに、金沢文庫本と高田専修寺本および元亨版・正徳版を比較すると文句の読み変えが多く見られて、自流の教説に都合良きように改変されている処も見られる。したがって上記四本の厳密な比較研究がなされねばならないが、今は問題を残して、非法然的教説を指示するのみに止める。

註

- ① 重松明久著『日本浄土教成立過程の研究』（四二三頁）。
- ② 淨影寺恵遠觀經義疏（淨全五卷、一九六頁）。
- ③ 選択集（土川勸学宗学興隆会本、七〇頁）。
- ④ 觀經疏自筆鈔散善義卷一（日本大藏經、九〇卷、七一頁）。
- ⑤ 觀經疏自筆鈔玄義分卷三（日本大藏經、八九卷、一五三頁）。
- ⑥ 教行信証文類、信卷（定本親鸞聖人全集、第一卷、九七頁）。
- ⑦ 教行信証文類、信卷（定本親鸞聖人全集、第一卷、一〇七頁）。この廻向発願心釈について、善導は二釈を出しているが、親鸞は「乃至」といって第一釈を用いず、第二釈を用いている。この点一考すべき余地ありと考える。

- ⑧ 散善義問答（平井正戒著、隆寛律師の浄土教、附遺文集、五〇頁）。
- ⑨ 三心料簡（法全、四四九頁）。
- ⑩ この「三心料簡以下二十七法語」の中に隆寛の考えが混っている。この三心料簡の釈義も隆寛のものと思う（拙著、法然浄土教の研究、四四頁参照）。
- ⑪ 往生院本（法蔵館刊、写真版、一〇二頁）。
- ⑫ 選択伝弘決疑鈔第三（浄全七卷、二七四頁）。
- ⑬ 観経疏自筆鈔散善義卷一（日本大蔵経、九〇卷、四六頁）。
- ⑭ 教行信証文類、信卷（定本親鸞聖人全集、第一卷、一〇二頁）。
- ⑮ 教行信証講義集成第六卷、一三四頁以下。
- ⑯ 具三心義上（金沢文庫資料全書、第四卷、四三頁）。
- ⑰ 散善義問答（平井正戒著、隆寛律師の浄土教、附遺文集、五〇頁）。
- ⑱ 観経釈（法全、一〇五頁）。
- ⑲ 観経釈（法全、一二〇頁）。
- ⑳ 観経疏自筆鈔定善義卷二（日本大蔵経、八九卷、三八九頁）。
- ㉑ 教行信証文類、行卷（定本親鸞聖人全集、第一卷、六八頁）。
- ㉒ 口伝鈔（定本親鸞聖人全集、第四卷、六六頁）。
- ㉓ 弥陀本願義第三（金沢文庫資料全書、第四卷、九二頁）。
- ㉔ 弥陀本願義第三（金沢文庫資料全書、第四卷、八一頁）。
- ㉕ 逆修説法（法全、二四六頁）。
- ㉖ 選択伝弘決疑鈔第四（浄全七卷、二九四頁）。
- ㉗ 往生浄土用心（法全、五五八頁）。
- ㉘ 浄土宗略抄（法全、六〇一頁）。
- ㉙ 念仏往生要義抄（法全、六八二頁）。

- ③⑦ 教行信証文類、化身土卷（定本親鸞聖人全集、一卷、二九〇頁）。
- ③⑧ 具三心義下（金沢文庫資料全書、第四卷、五七頁）。
- ③⑨ 極樂浄土宗義卷下（金沢文庫資料全書、第四卷、六八頁）。
- ③⑩ 觀經疏自筆鈔序分義卷二（日本大藏經、八九卷、二五四頁）。
- ③⑪ 逆修說法（法全、二四〇頁）。
- ③⑫ 觀經疏自筆鈔玄義分卷一（日本大藏經、八九卷、五四頁）。
- ③⑬ 極樂浄土宗義卷中（日本大藏經、九〇卷、一九四頁）。
- ③⑭ 石井教道編、法然上人全集の序文、四頁。